

【巻頭言】

感謝の心を忘れないで



京都医療科学大学 学友会会長 神澤良明(43 回生)

2011 京都総会で会長に就任させていただいて、早 2 年が過ぎた。

この 2 年間は会長として決まった役目を果たすのが精一杯であった。定期的に会長が果たす仕事としては学友だより 1 月発行号の巻頭言、支部総会への参加、入学式・卒業式への出席及び祝辞を述べること、学友会理事会への出席、学友会委員会への出席などがある。私にすれば大変な重責であった。特に文章を書くことが下手で、自分の思ったことをうまく表現できない。これがネックになって学友だよりの巻頭言を書くのが億劫になる。締切が近付いてやっと書き始めるため十分な推敲もできずに、不十分な表現のまま出稿となってしまう。

巻頭言を書くことで考えていることがまとめられ、今後の学友会活動の糧になることは判っているのだが、文章力、表現力が無いために苦勞をしている。

次に入学式・卒業式の祝辞を述べるという大仕事である。大学のこれらの式では、学長さま、理事長さま、南丹市長さま、学友会会長の順で式辞、祝辞を述べるのが通常ですが、私の順番は落語の寄席でいう「大トリ」です。「大トリ」ですから真打ち登場となるわけです。真打ちは、なるほどというような話をするものですが、これが興奮し舞い上がってしまい、それどころではありません。話す内容も真打ちだから毎回同じものでは芸がないと思ひ、何か気の利いた話はできないかと相当長い間気にはなっているものの具体的にまとまるのは前日で、頭に入らないまま当日を迎えるわけです。これでは上手く話が出来ないのは当たり前です。壇上に上がると大勢の学生、父兄、教職員が見える。それぞれの顔がこちらを見えています。初めは何とか原稿を見ながら話しているのが、祝辞は 5 分という制限があるから、経過時間が気になり時計を見てしまう、見たら原稿をどこまで読んだのか判らなくなってしまう。というような具合で「大トリ」とは言えない様な話で、まさに「前座」以下、まともな話が出来なく「落ち」が無いまま終わってしまう。

上手く表現できなかつたと、話し終わった後の空しさは相当大きく、落ち込んでしまう。考えていることを皆さんに伝える事ができる祝辞を述べる事が今後の大きな課題である。

このようなことでも会長を務めさせていただいたのは学友会を組織する皆さまのお陰に他ならない。教職員の皆さま、同窓生の皆さま、特に学友会理事会メンバーの協力が大きかった。理事会メンバーには大変お世話になった。

学友会事業のすべては各担当の理事さんが綿密な計画で実行していただき、非の打ち所がない。

昨年開催した創立 85 周年記念祝賀会でも西谷副会長が短大生が集まる場にしようとの提案で、短大卒業生の 1 回生から 18 回生の各学年に実行委員を指名し大勢の短大卒業生を集めていただいた。こんなに多くの短大卒業生が集まったことはこれまでにない。実行委員が頑張ってくれたお陰で短大生が卒業以来初めて一堂に会した。これは西谷副会長の発案、短大実行委員の頑張りに他ならない。学友会の中の短大卒業生のパワーを見せつけられた感がする。

昭和 2 年(1927)、レントゲン技術講習所創立から綿々と大学まで続く学園が 85 周年であり、学友会が生まれたのはその翌年昭和 3 年(1928)である。平成 25 年(2013)は学友会創立 85 周年である。

学友会創立 85 周年を記念して学友会バッジの制作を計画している。学会等に出席した際、このバッジを胸に付けている人を見た時の連帯感は計り知れないと思う。質問、声掛け等、このバッジが作る連帯感で非常に気楽に声をかけられるのではないのでしょうか。

福岡総会で、会長に再任していただきましたので、もう一期、有り難うという感謝の気持ちを忘れないで務めさせていただきますのでご指導、ご協力をお願い致します。

以上